

Daichikyo News

大地協ニュース



大地協ニュース復刊 第15号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《 広報宣伝部 》

発行日：2022 年 6 月 第 15 号

担当窓口：望之門保育園 さえき たけし 佐伯 剛

Tel 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記 →

QR コードをご覧ください。



大地協ニュースへのご感想・記事テーマリクエストなど

上記担当窓口まで皆様のお声を頂けましたら幸いです。

地域福祉の推進に必要な事を世間から学ぶ

思わぬことでこの度、倉光前会長の残任期間、会長に就任いたします。地域福祉の推進に皆様と共に努力してゆきたいと考えておりますのでご協力よろしくお願い申し上げます。

これからの地域福祉の推進には施設間の活動だけで充分でしょうか。子どもの貧困、虐待、「グリ下」等に見られるような様々な問題に目を向ける必要もあります。大地協には、若い先生方を中心に、「地域の子ども研究会」をはじめ多くの研究会があり、その働きには目を見張るものがあります。それでも難しい事案には、行政や奉仕団体・NPO 法人等との協働を求める必要もあるでしょう。

さて、私達は今世間で起きているさまざまな出来事から教訓を得ることが出来ます。今一番ショッキングな事と云えばやはりロシアによるウクライナ侵攻でしょう。日常が破壊される中、一番被害を受けているのは、子ども、障がいを持つ人、高齢者でしょう。戦争状態ではほとんどの場面で地域福祉どころではないのです。つまり福祉が成り立つには平和である事が条件なのです。私達が日頃子ども達に云う「正しくあること」「他者に暴力を振るわない事」等の言葉はあのような爆撃や殺傷の中では、何の意味も持たないのです。

北海道ウトロの海底に沈んだ遊覧船の事件から多くを学ぶことが出来ます。安全に対する取組があまりに杜撰すぎます。気象に対する判断・事故後の船の未修理・無線機の故障の未修理と、初歩的な安全対策の無さがあまりにも多すぎます。この事件からは安全に対する基本的な取組が如何に大切かを学ぶことが出来ます。

又、2 年 8 ヶ月前の山梨県道志村キャンプ場の当時小学 1 年生の行方不明事件は、今になって骨の一部や遺品が発見されている様ですが、母親は一切之を認めようとはしません。その気持ちは痛い程解ります。私達もキャンプ中の忙しい中でも、点呼やそれとなく目を見張らせることが事故や事件を防ぐ最善の道だと考えます。

まもなく、大地協では「セツルの家」の利用が始まりますが、参加する我々も、以前にも増して安全に心掛け今年も事故のない様にしたいものです。



社会福祉法人しんもり福祉会

松野 五郎

楽しい思い出は五感を通してできるもの



阿さひ保育園 青地 祐史

私自身、小学2年生まで保育所・学童クラブでお世話になっていました。今、保育士として経験を重ねるごとに当時の私は周りの大人に見守られながら伸び伸びと過ごさせていたでいたのだと改めて感じています。

現在、私たちは便利な機器やインターネットなどによる膨大な情報が溢れる中での日常を過ごしていますので、「それ知ってる!」「(TVやyoutube等で)見たことある」等の声を聴くことが多くあります。しかし、子ども達の豊富な知識に感心する一方で、「やったことがある」という声は意外と少ないものです。

昨年はコロナの影響で年長児クラス恒例の1泊卒園遠足は中止となり、日帰り遠足で琵琶湖セツルの家に行かせていただきました。

子ども達が目を輝かせて夢中で遊んでいる姿に、ここは大切な何かで溢れている場所なのだと強く感じさせられます。

今後も様々な制度や体制が変革され、便利になり、働き方や家庭の在り方など人生における選択肢が広がっていく中で私達の価値観や生活も大きく変化し続けていく事と思います。

自由に選択できる事が増えることに伴って家庭や個人毎に課題が細分化されるなど制度に取り残されてしまう家庭や個人が現在でも見られるようになっていきます。

大阪市地域福祉施設協議会は様々な福祉施設の幅広い視点からの意見交換をもとに、今の課題やどのような地域貢献ができるか等を共に学び合い、協力し合うことが出来る場だと思っています。

大地協で新しい扉を開きませんか…



特定非営利活動法人 子育て運動 えん

吉田 正義

大地協の仲間と立ち上げた「ドッジボール大会」「地域の障がい児者研究会」「中学生以上キャンプ」は「社会問題研究会」「中学生以上会議」と繋がり、地域の課題と関わった。

「利用者と施設職員の施設の利用についての調査」「施設を利用していないときの生活実態調査」「子どもの遊びと幸福感の関係調査」「障がいのある子どもたちの休日・長期休みの実態調査」「地域福祉施設職員の意識調査」は現在「西成区ヤングケアラープロジェクト調査」町の新しい仕組みづくりに繋がった。

「豊岡元気まつり」「神戸鷹取地域のボランティア活動」は東北・和歌山・広島・茨城・熊本・岡山・千葉に大地協職員と一緒に現地に赴く活動に繋がった。「山の家」で培った、お金の集め方やワークキャンプは、現在若者とともに空き家をリノベーションし「空き家」と「居場所」問題を繋げることに至った。きっと、一つの法人・施設だけではできなかった経験である。

課題を抱えた時、突き当たるのは壁ではない、扉である。その扉を開くのは自分だけだ。私たちのフィールドは「地域」である。人を繋ぐ仕組みをつくり、住民の主体性と対話型社会をつくるのは、私たち「地域福祉施設」だ。安心して人間関係をつくり合うことが出来る。

来る、「拠点を地域に」つくっていこう。一人ではできない活動が、一つの施設ではできない挑戦が、大地協ではできる。一つの活動が、そして挑戦が、また、人と人を繋ぐ手段となり、新しい出会いを育む。

さあ、私たちから繋がっていこう。「平和」を求めて。一人ひとりの強みを生かして、みんなで小さな一歩をつくっていこう。

私たちの繋がり、きっと次の世代に繋がっていく。0から1を作っていこう。無いものを私たちで。

小さな活動を継続してみんなでやっていこう、扉の向こうにあるのは「希望」。

『大地協』に出会って 刺激と熱意のある仲間

大阪市地域福祉施設協議会（大地協）に加入して、その中の様々な研究会では、学び合い交流を重ねていることを、毎年いただく報告書で知りました。

私自身が直接関わったのは、2021年2月に開催された「全国地域福祉施設研修会」でした。微力な私ですが実行委員として声をかけていただきました。高齢者介護施設や障がい者施設、学童、保育所などいろいろな施設が加盟されています。対象も子どもから高齢者まで幅広いものでした。

私の施設（保育所）は、生野区にあり在日韓国、朝鮮人が日本で一番多く住んでいる地域です。同じ日本人がおこなった歴史の中での事実は、想像を上回る残酷なもので、そこには多くの韓国人の命を奪い、苦しみを負わせた事実が残されていました。

私が日本人としてこの事を受け止めるのにはとても辛く正直、目をそらしてしまいたい気持ちにもなりました。しかし、過去の事として、目をそらさず過去のこの事実を受け止め、日本が大切な人の命を奪ったことから目をそらさず、「当事者」のひとりとして受け止めていく、ここで出会った在日とお互いの違いを認め合い一緒に歩みたい思いを大切に35年この「地域」の中で働いてきました。

私にとって大地協は他の地域で働く人の思いや、地域の中で抱える問題や課題を年齢や業種に関係なく話してできる場、そして共に考える仲間と出会える場としてとても貴重なものだと感じました。携わる職員の方々の地域福祉への意識に“刺激と熱意”を感じました。またそこに参加するひとりひとりが作っていく「大地協」に関われることを感謝しています。



大阪聖和保育園 長瀬 光子

「人と人のつながりをつくる セツルメント」

110年以上になるのでしょうか。石井十次先生は、大阪の地で隣保事業を始められました。セツルメント運動（英: settlement house movement）とは、正確には「ソーシャル・セツルメント」であり、隣保館などと訳されます。社会教化事業を行う地域の拠点のことです。私は、大阪の養成校で働かせていただきながら、故菅先生、故小椋先生、松村先生、小谷先生、倉光先生等多くの諸先輩方より「大阪のセツルメント」について御教授いただきました。

若き日に貴重な学びの時を与えられた「人と人とのつながり」に心から感謝申し上げます。印象的なことは、「石井十次先生は、いつも困難な課題に立ち向かっていかれた」、「大阪のセツルメント事業は、地域の人と横につながりながら、自由な雰囲気の中で保健、医療、保育、子育ての問題、高齢者の問題等、様々な問題につながっていった」、「セツルメントの一番大切なことは、地域のニーズをいかに的確につかむかということにある」、「福祉の原点は地域である。」ということです。

セツルメントは目の前の問題だけではなく、「なぜ問題は出てくるのか、どのような仕組みがあれば問題はなくなるのか」といった根源的な課題解決に着目し、調査、研究、ニーズの把握に努めながら実践してきたと言えます。時代は変わり、「社会的子育て支援」等様々な仕組みは作られてきました。しかしながら、子どもの虐待、ネグレクト等、根源的な課題は今も変わりません。大地協のセツルメントは、基本にある問題を見つめ、援助するという関係をどのように克服していくのか、そこに新たな「人と人とのつながり」はできるのか。石井十次先生や諸先輩方の精神を次世代に継承しつつ、時代に即応した大地協の（定款に記載された）目的の実現に期待したいと思います。そして、「人と人とのつながりをつくる セツルメント」の精神が生かされることを祈念しています。



大阪総合保育大学 大方 美香

今手を差し伸べ できることから始めよう



社会福祉法人都島友の会
渡久地 歌子

今年沖縄は復帰記念 50 周年を迎え、歴史的節目 5 月 15 日には記念事業、イベントが各地域で催された。

現在尚、ロシアとウクライナ、シリアとイラク、イラン、イスラム、パレスチナ等、国同士、人間同士、宗教や思想の違い、領土の奪い合いで戦争が起きている。

真っ先に大きな犠牲者は、女性、子ども達、老人、障がい者、病人等、力のない弱い人達です。

日本も終戦まで大空襲があり、広島、長崎には原爆が投下、沖縄にアメリカ軍が上陸火炎銃撃、襲撃、多くの犠牲者が出た。

社会福祉のきっかけも、終戦海外からの復員軍人、引揚者、戦争での障がい者、遺族、生活困窮者、多くの戦争被害者、国民全体に「人権の保障」「国の政治の仕組み」等、昭和 21 年 11 月、日本国憲法が公布、翌年 5 月 3 日施行の新憲法 25 条に国の義務を明記、差し詰め荒廃した社会の立て直し、命の問題点から支援が始まった。昭和 20 年から令和 4 年へと 10 年ごとの社会福祉の改正。福祉とは“福”も“祉”も「幸せ」という意味を持つ。

「幸せでない状態を減らす」ことから「幸せをプラスにしていく」です。

当法人の歴史も昭和 6 年から現在までに満州事変、世界大戦、第二次世界大戦、敗戦と、戦禍をくぐりぬけてきた。

大きな目標に、当法人の創設者の体験から「無知と貧困は病魔を広げる」がある。

昭和 20 年 1 月 2 月、15 歳、13 歳児愛児を亡くした。社会情勢悪化、感染症、病院、薬品、栄養全て乏しい、病魔は子どもの体を蝕んでいく、親としてのざんげが続いたが、この 3 つの不幸を小さくする為、昭和 24 年、都島児童館「ぼくたちの家」誰でもいつでもおいで、子ども達の居場所、働く婦人、乳児、幼児、障がい児者、学童、高齢者、地域の皆さんが集える現在の「産まれてから、終いの住みか」「なんでも相談」「研修センター」みんなが集う都島友の会の姿です。

福祉のこころ



社会福祉法人水仙福祉会
松村 寛

大阪の社会福祉事業は、全国にない質と量の発展があったところです。これは大阪の社会事業界に身を置く者として、大変誇りに思います。戦前は公的な支援が全く無いなかで、先駆者の方達が活動されたわけですから、その困難さは想像が付きません。しかし、その活動は、セツルメントの思想にあったと理解できます。その思想は、対象者が貰うもの、与えられるものではなく、対象者への教育活動が主体であり、共に支え合う、築き合う活動でありましたので成り立ってきたのでありましょう。

戦後、国民の生活や健康が国家責任として公的給付されるようになりました。これは社会事業家にとって、大変な喜びであったと言えます。そして全国のセツルメント施設の集まりである「全国隣保事業施設大会」が昭和 32 年に大阪で開かれ、「隣保事業の時代は終わった」と宣言して、組織を解散することになってしまいました。

これに対して大阪市の隣保事業施設では、国から公的助成金が出ても、セツルメント精神は大切であると主張し、大阪のみ新たに「大阪市セツルメント研究協議会」を組織発足させ北市民館に事務局を置き、当時の今川学園三木達子園長が会長となって活動を継続したのでした。これが『大地協』の前身です。

これこそ本当の意味での社会事業家魂を持つ大阪の先駆者たちの姿と言えます。社会事業家は、様々な困難を抱えた利用者のために活動する立場です。その困難を取り除くためには、物理的に何かを与えることではありません。それは公の社会資源を活用することです。しかし社会事業家は本人主体の立場に立って環境を整え、精神的に支え、社会的自立を支えていく役割が大切です。

現代の社会事業家は、安易な公の施設運営の原則の枠の中で仕事をしているのが実態です。本来は、利用者ひとり一人を支援する「福祉のこころ」を持つ社会事業家を目標にしたいと思っています。

社会福祉の視点を基礎にした自由な発想を！

大地協は「大阪市セツルメント研究協議会」「大阪市コミュニティセンター研究協議会」を経て現在に至っています。従って”セツルメント”を基盤として研究協議に焦点を当てた組織であります。

地域・家庭には、高齢者、子ども、妊婦、障がい児者等様々な人が生活しています。一方で社会福祉のアプローチとしてはそれぞれの根拠となる法律の観点からそれぞれの対象別（高齢者—特養、デイサービス、訪問介護 etc.障がい児者—通所及び入所施設、デイサービス etc.子ども—保育所 etc.）の対応となっています。

その中で私たちはそれぞれの対象別の施設職員として対応しているわけですが、主体となる当事者に対して本人を取り巻く家族関係等を視野に入れて対応することが求められています。私自身も23年前、社会人2か月の娘が大きな病気で医師から死を宣告され、幸い命を取り留めたものの重い障がいを背負うこととなりました。現在ではデイサービス、訪問介護等のサービスを受けながら生活しています。具体的利用の際サービス提供者と利用者との”想いの差”を感じざるを得ない場面に出会います。その際サービス提供責任者と話をしている”家族の想い”もしっかり聞きながら本人のプログラムを決めてもらえると本当に安心できるものなのです。

大地協は「自由な発想で！」ということが強調されてきていました。しかし根本であるべき主体は誰なのか？家族、地域を視野に入れた発想が大切にされなければなりません。一方で地域にとって何が必要か？という点に関しては、個人の感覚と合わせて客観的なデータが求められてきます。コロナ禍がどのような影響を及ぼし、何に取り組めばよいのかについては是非調査活動にも取り組んでいただきたいと思います。

役割が人を育てる

大地協の特徴は施設長、職員が一緒に研究活動等に取り組めることが挙げられます。セツルメント等について詳細を記すことはできませんが、歴史的経過を含めた上でそれぞれ研究会活動や行事を行っています。その内容については実際の活動や取り組みのための議論を通じて見えてくるものがあるのです。そうした意味で大地協は、やってみたいという意欲のある人に機会を与えられる場所なのです。

大地協にとって今後とも支える人を育てていく必要が急務です。ところが現状は残念ながら加盟施設の職員みんなが同じ方向を向いているとは思えない状況にあります。事務の軽減を図るところか一層増えており余裕を失っているかもしれませんが、少なくとも施設の仲間として”応援”を！施設で人を支えることをお願いしておきたいと思います。コロナ禍で失った「しゃべるな！近寄るな！集まるな！」から脱却していく知恵をみんなで見つけていただきたいと切にお願いします。



大地協前事務局長 元・水仙福祉会
石井記念愛染園 小谷 啓二

大地協の皆様へお伝えしたいこと

20年前、私たちは『町を歩こう』のスローガンを掲げて地域福祉の原点に立ち還るべく、新たな模索を始めました。そして2008年、大地協はNPO法人格を取得し、新生への一步を踏みだしました。『地域福祉の諸問題』や『大地協ニュース』の復刊をはじめ、各部会や委員会を再編し、研究協議会として現在も地域福祉の展望を探り続けています。

私たち福祉に携わる者にとって、地域福祉の実践は、どこまで可能か？何をどこまですれば胸を張れるのか？福祉施設や、その職員の潜在的ボランティアリズムをどう実現、実践に結び付けられるのか？地域福祉の実践は対価を得る対象（すなわち、仕事枠の一環）の範疇なのか否か？仲間の実践者をどうやって増やすのか？これらの疑問・葛藤は、これからも引き続きの課題です。

ずっと以前から大地協加盟施設では、施設間での温度差、加えて同じ施設での職員間での温度差が浮き彫りになっていて、解決できていません。これもずっとの課題であり、なかなか崩すことのできない高い壁であります。そしたら、どないしたらええねん？

この4月から施設を離れ一個人の立場となった上で勝手な思いを吐露すると、まず第一に、枠をはみ出すことができるリーダー施設（あるいは法人）が欲しいのです。今まで、せっかくのアイデア、やってみたい企画が、話だけで終わってしまうことの、何と多かったことか。そのアイデアを実現させるためにはどれほどのハードルのクリアが必要か。結局は絵にかいた餅となり、断念となる。何とか格好だけの実現のためには、既定の枠内に収めるしかないのが常でした。それがゆえにアイデアを100%汲み取ってくれるリーダー施設が欲しいのです。残念ながら、私にはその冒険ができませんでした。枠の外に踏み出すことができませんでした。

第二に、枠をはみ出すことができる人材（リーダー）を施設（または法人）が認知し、後ろ盾となって後押しをして欲しいのです。大地協には熱い思い、豊富なアイデアを持った人材が大勢います。彼らを支援し開け放って、放し飼いにしたいのです。

第三に施設職員みんなで地域福祉の実践を分担し、下支えをして欲しいと思うのです。通常の業務で厳しい状況にある施設職員の皆さん。自身の福祉の眼を、あと30度広げてみませんか。視野を広げることで、本来業務の幅も必ず広がります。広がった視野には、自己肯定と希望が生まれます。新たな友も芽生えます。30度が自然に40度となり、やがて全方向に開けると信じます。

そして最後に、施設、施設職員の長が、思い熱き職員の意思を理解し尊重し同調し、地域福祉実践のための環境を整え、施設のトップ自らが率先してソーシャルアクションを起こしてほしいと願います。

今、大地協には、やる人・やる施設・やる団体、すなわちセツラーが必要なのです。あかんかったらやり直し、改めてチャレンジする。手法を変えて取り組む。10年前に立ち戻って問い直してみる。これを繰り返す営みこそが、私たちが目指す福祉社会の実現に繋がるのだと確信します。

我らが大地協の仲間の皆さん、機は熟しています。コロナ禍の今こそセツルメントのノロシを上げようではありませんか!!。



大地協前会長

倉光 慎二